

ゼミ論文の表記（日本語、横書きの場合）

I 文章表記

① 現地の国名、地名、人名など

日本、中国、台湾、香港のもの以外は原則としてカタカナ書き

- ・ 漢字による表記が慣例になっている場合（たとえば金正日、金大中）→漢字で表記
- ・ 一般化していない固有名詞（地名、人名、機関名、会社名など）
→最初に限りその原語をカッコ内に付記する

② 数字の表記

原則として算用数字を使う

- ・ 年の表記は原則として西暦
- ・ 万以上の数字には万、億、兆などを用いる

※数桁の数字は途中で改行しない（次の行に改める）

例

本土ミサイル防衛(National Missile Defense: NMD)の配備についてクリントン (Bill Clinton) 大統領は脅威、技術開発、コスト、軍縮および同盟諸国の立場などの全体的な戦略環境に基づいて決定することとしていた。しかし、2000年9月にクリントン大統領はこの決定を次期政権に先送りした。NMDの配備に関する決定は、ブッシュ (George W. Bush) 政権になって本格的に進められている。

II 注の表記

文中の該当箇所に通し番号をつけ、ページ脚注。

注をつけるには、主に2つの目的がある。

① 本文で行った主張を補足する

該当箇所の終わりに注をつけ、文中に書いたのでは文章が煩雑になったり、論証がわかり道にそれてしまうのだが、論証のために必要な情報を記す。例えば

- ・ 誤解を防ぐための論述
- ・ 当然あるはずの反対意見への考慮
- ・ 少し離れてはいるが傍証または補遺としてはたらく資料

② 引用した資料の典拠を明示する

引用した部分の終わりに注をつけ、出典を示す。詳しくは事項を参照のこと。

※注は、原則として各文章の末尾に付ける。その際、脚注番号は句点より内側に振ること。

※一つの文に、複数の資料からの情報が盛り込まれる場合は、どの情報についてどの資料に依拠したのか、はっきりさせること。

III 引用・参照の方法—出典（参考文献）の表記

- ・ 単行本 : 著者『書名』（出版社、出版年）、頁（あるいはX-Y頁）。
- ・ 論文 : 執筆者「論文名」編者『論文掲載書名』（出版社、出版年・月）、頁。
- ・ 雑誌論文 : 執筆者「論文名」『雑誌名』巻号（出版社、出版年）、頁。
- ・ 新聞 : 執筆者「見出し」『新聞名』年月日。

☆同じ文献を繰り返し利用する場合

- ・ すぐ前の注で挙げたものと同じ文献から引用する場合。

同書（同論文・同記事）頁。

- ・ 既に注で挙げた文献を再度利用する場合。

筆者（執筆者）、前掲書（前掲論文・前掲記事）、頁。

※ただし、同じ筆者が書いたものを複数引用する場合は
筆者、前掲書、（出版年）、頁。

例 1 単行本、 2 論文、 3 既に挙げた資料の引用（日本語）

中国は、建国以来 50 年にわたって一党体制が続いてきた。一党体制の継続とともに、それへの問いかけは、党の内外から繰り返されてきた 1。1980 年代に入って、幾度かの学生デモは民主・自由化を求めてきた。しかしながら、そのいずれものも、否定されてしまったのである。民主化運動の特質を、天児慧は次のように指摘している。すなわち「中国における民主化運動の主体的基盤や政治的環境の厳しさを意味するものである」 2。しかし、小島朋之が指摘するように、「学生デモが主張した民主・自由化を含めて改革潮流はすでに体制内にビルト・インされていた」のである 3。

- 1 小島朋之「中国共産党：一党体制の存続と変容」野村浩一編『岩波講座 現代中国 第 1 巻 現代中国の政治世界』（岩波書店、1989 年）、111-112 頁。
- 2 天児慧『歴史としての鄧小平時代』（東方書店、1992 年）、146 頁。
- 3 小島、前掲論文、113 頁。

・インターネット上の資料

「表題」（ホームページ名、URL、アクセスした日付）

例 インターネット上の資料

双方は、目下の情勢において、両国間の協力の重要性は一層増していること、及び両国間の友好協力を更に強固にし発展させることは、両国国民の根本的な利益に合致するのみならず、アジア太平洋地域ひいては世界の平和と発展にとって積極的に貢献するものであることにつき認識の一致をみた。双方は、日中関係が両国のいずれにとっても最も重要な二国間関係の一つであることを確認するとともに、平和と発展のための両国の役割と責任を深く認識し、21 世紀に向け、平和と発展のための友好協力パートナーシップの確立を宣言した 1。

- 1 「平和と発展のための友好協力パートナーシップの構築に関する日中共同宣言」（外務省ホームページ、http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kaidan/yojin/arc_98/c_kyodo.html、2002 年 5 月 7 日）。

☆図や表の引用

図や表の下に出典を付ける。掲載する情報は脚注と同様。

例：（引用した図や表の下に）

〔出典〕小島朋之『現代中国の政治』（慶應義塾大学出版会、1999 年）、322 頁

Note: From Etzold, Thomas H., and John Lewis Gaddis, *Containment: Documents on American Policy and Strategy, 1945-1950*, (New York, Columbia University Press, 1978) p. 14.

※図や表を自分で作成した場合

筆者が作成したことを明記する。また、データなど、参考にした資料も明記。

例：表は筆者作成、推移した人数の値については、小島朋之（2000 年）、192 頁参照。

IV. 参考文献表

注とは別に、論文やレポートの末尾には、直接引用した資料、および参考にした資料をリストとして挙げるのが求められる。各資料の表記方法はⅢに示したとおり（ページは表記しない）。参考文献表作成方法（参考資料の並べ方）には様々な方法がある。一般的なものを下に記しておく。使用した資料の量や、割合などによってこれらの方法を組み合わせる。

- ・筆者の姓 50 音順（アイウエオ順）、同じ筆者の場合出版年の古いものから
- ・日本語、英語、中国語など言語別に分ける
- ・単行本、論文、新聞など、資料の種類別に分ける